



Title	突厥トニユクク碑文笥記 : 斥候か逃亡者か
Author(s)	鈴木, 宏節
Citation	待兼山論叢. 史学篇. 2008, 42, p. 55-80
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7840
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

突厥トニユクク碑文節記

——斥候か逃亡者か——

鈴木 宏 節

はじめに

古代トルコ系遊牧民の突厥は、中央ユーラシアの騎馬遊牧国家のなかで最も早く文献史料を残した。とりわけ北アジアのモンゴル高原を中心に勢力を有した東突厥では、第一可汗国（西暦 552～630 年）の滅亡後、唐朝の羈縻支配（630～682 年頃）から独立を果たした第二可汗国（682 年頃～744 年）のもと、史上はじめて遊牧民みずからの言語（古代トルコ語）と固有の文字（突厥文字／テュルク＝ルーン文字）とをもちいた文献史料、突厥碑文が誕生した。

その突厥碑文のひとつ、モンゴル国中央部に現存するトニユクク碑文は、建国の初代から三代までの遊牧君主可汗^{カガン}に仕えた重臣噶欲谷^{トニユクク} Toñuquq（阿史徳元珍）のために捧げられた墓碑銘である¹⁾。この碑文は、トニユクク自身がその生涯の戦歴を一人称で語るという文体で叙述されており、碑文の主人公にして語り部でもある彼が参戦した独立戦争をはじめ、その後に遂行した対外戦争を主題にする紀功碑でもある。それ故トニユクク碑文は、まさに突厥興隆の立役者そのひとの言葉によって同時代の遊牧民の経験が生き生きと伝えられているという点で、中央ユーラシアの草原世界に生きるトルコ・モンゴル系遊牧民に脈々と受け継がれた英雄文学の嚆矢として評価されている。

ところで、このトニユクク碑文の大部分を占める戦争記事には、現在まで伝えられている突厥碑文のなかでも唯一この碑文にのみ在証（attest）されている興味深い一語が登場する。従来、その単語は körüg「斥候、スパイ」あるいは küräg「逃亡者、避難民」と転写・翻訳されてきた。しかし、突厥碑文の研究が開始されて百年以上経過した現在でも、どちらの単語であったのかは確定されていない。

そこで、本稿はこの未解決の一語について語義確定することを目的とする。そもそも中央ユーラシアの草原世界で活躍した遊牧民が残した文献史料は、定住農耕民のそれに比して稀少かつ断片的である。この事実は遊牧民の歴史と言いながらも、その多くは定住農耕民の記録によって再構成されていることを意味する。そのため、突厥碑文に現に残された単語の一語一語が、中央ユーラシアにおける遊牧民の歴史を他者の記録によらず復元するに際して大きな意味を有している。わけでもトニユクク碑文は、彼の没年と推定される 725 年以降の間もない時期に成立したと考えられており、8 世紀に誕生した突厥碑文の先魁として注目されている。わずか一語ではあるが、この単語の語義確定は、トニユクク碑文だけでなくその他の突厥碑文を読み解く上で、あるいは突厥碑文のテキストに史料批判を加えてゆく上でも、有効な作業となるはずである。

第 1 節 先行研究の整理

トニユクク碑文は、それぞれ四面に刻文された二本の石柱からなり、第一碑文、第二碑文と呼ばれる。その内容は第一碑文から第二碑文へと連続しており、突厥文字によるテキストは罫線によって仕切られた全 62 行から構成され、各柱それぞれ西、南、東、北面の順に行が進行する（内容構成については第 3 節の【表】を参照）。

問題の単語は、四例が碑文の三箇所を確認できる。すなわち碑文 8、9

行目〔第一碑文・南面1行目、2行目／後掲【史料A】〕ではk ü r gと、29、33行目〔第一碑文・北面5行目、9行目／後掲【史料B】&【史料C】〕ではük ü r gと翻字 (transliteration) される²⁾。突厥文字の転写法則からすれば、どちらの綴りからでもkörügあるいはkürägと再建 (transcription) することができる。以下、この単語の解釈をめぐる研究史を整理したい。

先ず、ラドロフ氏がkörügと再建して、動詞kör-「見る」の派生名詞körüg「斥候、スパイ」であるという解釈を提案した〔Radloff 1899, pp. 5, 38〕。これが長らく継承され³⁾、とりわけクローソン氏は本碑以外にこの単語の在証例を見いだせないことから、初期古代トルコ語 (突厥碑文) に固有の語ではないかと注記している〔ED, p. 741b〕。

その後、トゥグシェヴァ氏が10～11世紀に成立したと推測されるウイグル文書 (MS SI 2 Kr 17) 中に、動詞kürä-「逃げる」の派生名詞としてkürägと読むべき箇所を発見し、「逃亡者、避難民」と訳した〔Tuguševa 1971, pp. 176-177, 179〕。続いて、ハミルトン氏も10世紀末の成立と推測されるペリオ将来ウイグル書簡 (Pelliot Ouïghour 15) 中にkürägと読むべき箇所を発見し、トゥグシェヴァ氏の発見を承けて「逃亡者、避難民」と翻訳した。その語註においてハミルトン氏は、トニユクク碑文の当該箇所をもküräg「逃亡者、避難民」と解釈すべきと通説に修正を促した〔Hamilton 1986, p. 112〕。その結果、この提案がエルダル、テキン、ベルタ、リバツキー氏らによって採用されてきたのである⁴⁾。

ただし「斥候、スパイ」説に依拠する研究は最近でも皆無ではなく、突厥碑文の訳註研究では芮伝明氏や耿世民氏が、突厥の軍事活動という観点からは、蔡鴻生氏が「斥候、スパイ」説を採っている⁵⁾。

そもそも長らく「斥候、スパイ」説が通用してきたにもかかわらず、同じ古代トルコ語 (チュルク語) とは言え後代に成立したウイグル文献の用

例によって突厥碑文上の語義が一転させられてしまった観がある。しかしながら、碑文上の語義を判定するに際しては、その文脈に即したものかどうかを点検すべきであろう。そこで次節では、テキストの文脈全体を捉えるため、トニユクク碑文における全ての用例を再確認したい。

第2節 トニユクク碑文における用例

本節では、トニユクク碑文に問題の単語が現れる三箇所を順に提示する。それぞれの前後関係を把握するために、用例に前後するテキストも引用して語註を附している。本稿のテキストは、1998年にモンゴル国から大阪大学に将来された拓本に依拠して新たに作成したものであり⁶⁾、引用史料としてローマ字による再建テキストと拙訳とを掲載した。以下、再建テキストは、斜体を利用して残画が見える文字の再建を示し、下線で翻字に表記されない母音類を、...で残画が見えるが判読できない文字（文字数は計測により推定）を示す。拙訳中の（ ）は意味を補った部分である。なお、問題の単語について、再建テキスト中では *körüg/küräg* と、拙訳中では **斥候／逃亡者** と並記した。

1. トニユクク碑文 8、9 行目【第一碑文・南面 1、2 行目】

最初の用例が登場する場面は、第一可汗国滅亡後、突厥遺民が散居するゴビ砂漠の南、陰山山脈からオルドスにかけての一帯である。ここで唐朝に対して蜂起し、突厥の復興を果たした初代可汗^{クトゥルグ}骨咄祿（在位 = 682 頃～691 年）とトニユククのもとに、ゴビ砂漠の北、モンゴル高原を本拠にしていた同じ古代トルコ系遊牧集団^{トクズ=オグズ}九姓鉄勒から到来した者があった。この到来者こそが問題の一語で表されたものであり、トクズ = オグズの内部情報——唐朝と契丹に突厥包囲作戦を呼びかけるトクズ = オグズ可汗の言葉——をトニユククに暴露した。彼はそれを聞くや、ただちに骨咄祿

に進言を行ったのである。このような経緯を経て、引用部分の直後からは突厥のトクズ＝オグズ遠征記事がはじまる。やがて彼らはこの戦いを勝ち抜き、モンゴル高原中西部、ハンガイ山脈に位置する古代トルコ系遊牧民の聖地「オテュケン山」を奪取することになる。

〔史料A〕7～12行目〔第一碑文・西面7行目、同・南面1～5行目〕

(7) birlä : eltärış qayan : bolayın : beryä : tavya^{われ}ty : önrä qitāñiy : yiryay
oyuzuy : üküš ök ölürti : bilgäsi : çavışi : bān ök ärtim : çoyay quzın :
qara qumuy : olurur : ärtimiz :

(ビルゲ＝トニユククことボイラ＝バガ＝タルカン) 7) とともに我(骨咄禄)はエルテリシュ可汗になろう！」(と彼は言った。そして)
南に ^{タブガチ}唐^{キタイ}を、東に契丹を、北に(トクズ＝)オグズを、非常に多く彼は殺した。彼の参謀、彼の軍事司令官は、私(トニユクク)、まさに私であった。チョガイ(山脈)の北麓^{カラ＝クム}を、黒沙を我々は占拠していた。

(8) keyik yeyü : tavışyan yeyü : olurur : ärtimiz : bodun : boyuzi : toq
arti : yäyimiz : tägrä : u^四 oq tag arti : biz : äntäg : ärtimiz : an^a olurur
ärkli : oyuzdintan : körüg/küräg kälti :

四つ脚の獣を食べながら、野兎を食べながら、我々は暮らしていたのだった。民の腹は満ちていた。(一方)我々の敵はまさに周囲の国境のようであった。我々は以上のようにであった。そのように暮らしている時に、オグズから斥候／逃亡者がやって来た。

(9) körüg/küräg savı antay : toquz oyuz : bodun : üzä : qayan : olurti
ter 《中略》

斥候／逃亡者の言葉は以下のものである。「トクズ＝オグズの民の上に可汗が即位した」と。《中略：斥候／逃亡者の言葉》

(11) 《中略》 *tavyāc̣ : berdin yān t̄ag : q̄itāñ : öndün yān t̄ag : bān*
yirdinta yān : t̄agāyin : türük sir bodun : yerintā : idi yorımazun : usar
idi : yoq q̄isālīm

《中略：斥候／逃亡者の言葉》『唐は南側から迫れ。契丹は東側から迫れ。我（トクズ＝オグズの可汗）は北側から迫ろう！突厥の麗しき民の地において（彼らを）決して生きてゆかせるな。もしできることなら、まったくいなくなるまでに（彼らを）我らは押しやろう！』

(12) *ter m̄an : ol sav̄iy : eš̄idip : tün ud̄is̄iqim : k̄ālm̄adi : k̄üntüz :*
olursuqum k̄ālm̄adi : anta ötrü : qayan̄ima öt̄üntim : an̄a öt̄üntim

《後略》

と、我（トクズ＝オグズの可汗）は言う」（と）。その言葉を聞いて、夜、私は眠るべき状態にならなかった。昼、私は腰を落着けるべき状態にならなかった。それ故に、我が可汗に私は申し上げた。次のように私は申し上げた。 《後略》

【語註】 1. 7, *bolayin* 「我はなろう」：ジロー氏が接尾辞 *-äyin/-ayin* について、突厥文字の表記上 *y/Y* と *n/N* の間に *i* の文字を書く場合のみ、それが一人称単数の命令形語尾 *-yin/-ȳin ; -äyin/-ayin* を形成するという法則を提案した。従って *Y* と *N* の間に *i* を書いていない本箇所 *bolayin* の語尾 (*-ayin*) は一人称単数命令形の語尾ではあり得ないという [Giraud 1961, pp. 33-34, 73-74] 8)。また、テキン氏も同じ立場から、本箇所の *-ayin* を「～しつつ」という意味の副動詞形成語尾であると考えている [GOT, pp. 183-184, 187; Tekin 2000, p. 176]。しかしながら、これら両氏の説に対しては、同時代の突厥碑文、ビルゲ＝カガン碑文（735年建立）で、*y/Y* と *n/N* との間に *i* の文字を書かない一人称単数命令形の例が二箇所存在する事実が反証となる。その東面 35 行目には *i g d y n* と刻まれている

る。この直後には引用を示す *teyin* 「と言いつつ」が続くので、再建された *igidäyin* の *-äyin* は「～しつつ」を意味する副動詞形成語尾よりも「私は～しよう」を意味する一人称命令形語尾とみなして「私は養おう」と訳出すべきである。また、同じく東面 41 行目には *ñ T Y n* と刻まれている。こちらでも直後に引用を示す *tep* 「と言って」が続くので、再建された *añitayin* は動詞 *añit-* の一人称単数命令形とみなすべきである。このように *-äyin/-ayin* を再建する *y/Y* と *n/N* との間に *i* が無いことは、この語尾が一人称単数命令形ではないと判断する材料にはならないのである。従って、トムセン、マロフ、アールト氏などに従い [Thomsen 1916, p. 49; Малов 1951, pp. 61, 65; Aalto 1958, p. 33]、動詞 *bol-* 「～になる」に一人称単数命令形の語尾 *-ayin* がついていると解釈する。

1.7, čoyay quzi, qara qum 「チョガイの北麓、黒沙」：この部分の最初の一語 (č W G Y) は *čoyay* と *čuyay* とともに再建できるが、本稿では *čoyay* と再建して「チョガイ」と表記する。なお、先行研究で *čuyay* としている場合は、これを「チョガイ (チュガイ)」とする。

さて、両地名ともに、岩佐精一郎氏によって詳細な地理比定が行われている [岩佐 1936, pp. 106-119]。まず、チョガイ (チュガイ) の方は、同じ突厥碑文であるキョル＝テギン碑文 (732 年建立)・南面 6 行目 [ビルゲ＝カガン碑文・北面 5 行目] に *čoyay yis* 「チョガイ山脈」と現れる。岩佐氏はこれを陰山山脈に比定した。その上で漢籍に「〔永淳元 (682) 年、^{あしな}阿史那〕伏念 既に破れたれば、骨咄祿は亡散を鳩集して、總材山に入り、聚めて羣盜を爲し、衆五千餘人を有す」と記載された「總材山」を *čoyay quzi* 方面にあるものとみた [岩佐 1936, p. 118] 9)。従って、トニユクク碑文の「チョガイの北麓／北斜面」とは、当時、骨咄祿が突厥遺民を糾合していた陰山山脈の北麓方面を指す。

他方、^{カラ＝クム}黒沙とは『旧唐書』卷五・高宗本紀下 [中華書局標点本, p.

110] などに「〔永淳元年〕突厥の餘黨 阿史那骨篤祿等^{クトゥルグ}は殘衆を招合して、黑沙城に據り、并州北境に入寇す」と見える「黑沙」のことで、後に二代目可汗^{もくてつ}の默啜（骨咄祿の弟、在位 = 691 ~ 716 年）が牙帳を置いた「黑沙南庭」の所在地と考えられるので、岩佐氏はこれを突厥遺民の間接支配を担っていた单于都護府方面に位置する地名であり、現在のフフホトの北方で、陰山山口の谷原を指すと考証している [岩佐 1936, p. 118] 10)。

1. 8, uċ oq 「国境、まさに」: ラドロフ氏は突厥文字で W ċ uQ と刻まれているこの部分を uċuq と一語に再建して「隼」と試訳したが [Radloff 1899, p. 5]、これでは全く意味をなさない。一方、トムセン氏は uċuq を動詞 uċ-「飛ぶ」の派生名詞とみなし、「肉食鳥、猛禽類」を意味するという仮説を提示した [Thomsen 1924, p. 163; 小野川 1943, pp. 70, 145; Малов 1951, p. 51; ДТC, p. 604a]。また、ジロー、クローソン、リバツキー諸氏はいずれも uċuq と再建し、これをそれぞれ「鳥の群」と訳している [Giraud 1961, pp. 60, 77-78; ED, p. 22b; Rybatzki 1997, p. 87]。しかしながら、「肉食鳥、猛禽類」とするのは意識にすぎるし、「鳥の群」とするのも文脈上いささか唐突かと思われる。他方、テキン氏は同じく uċuq と再建して「頂上、先端」と試訳したが [GOT, p. 389]、後には oċuq 「暖床」と修正した [Tekin 1994, pp. 4-5, 30-31; Tekin 1995, pp. 212-213; 次註参照]。

ところで以上とはまったく別に、ベルタ氏は uċ oq と二語に分けて再建し、uċ を「先端、端、境界」という意味を持つ名詞 [cf. ED, p. 17b] であり、oq は強調の意味を表す不変化詞 [cf. GOT, p. 172; Erdal 2004, pp. 342-343] であると提案した [Berta 1995, pp. 315-316]。本稿は、ベルタ氏の解釈を採用して、yäyimiz tägrä uċ oq täg ärti の一文を「我々の敵はまさに周囲の国境のようであった」と訳出する。

1. 8, äntäg 「以上のよう」: ラドロフ氏はこの部分を b g と翻字して bāg と再建、解釈した [Radloff 1899, p. 5]。しかし、一文字目を b と読むこ

とは到底無理であり、文脈も通じさせることができない。トムセン氏は nd(nt) g と翻字し、andäg(antäg) と再建し、これを指示形容詞 ol に täg が付いた形 (an+täg) であると解釈した [Thomsen 1916, pp. 95-96]。一方、マロフ氏は最初の文字をイエニセイ碑文で使用される ṣ を表す文字 $\square$ のことであると考えて、この部分を säg と読むことを提案。カーシュガリーの辞書にある単語から語義を類推し、これを「(腐った) 獣の死体」と翻訳している [Малов 1951, p. 57, 65]。このマロフ氏の翻訳を採用しながら、アールト氏は säg と再建している [Aalto 1958, pp. 32-33]。ジロー氏はトムセン氏の文字解釈を参考にして、最初の文字が nt(?) であるという仮説をたて、直前の部分との対応から an-täg と再建した。そしてカーシュガリーの辞書にある単語を参考に「シロハヤブサのように」という解釈を示した [Giraud 1961, pp. 24, 52, 77-79]。このジロー説を採用したリバツキー氏は、一文字目に関しては η (あるいは s) と読み、二文字目との間には t を補い an täg と再建した。しかし、解釈については直前の部分 [uč oq の註を参照] との対応で、「我々は猛禽類(?) のようであった」とするにとどまっている [Rybatzki 1997, p. 87]。テキン氏もマロフ氏と同様に最初の文字をイエニセイ碑文の $\square$ と同一とみなしたが、単に ṣ ではなく、[aṣ] の音を表す文字とみなしている。そして、この部分を aṣig(?) と再建して「山道、峠」と訳した [GOT, pp. 22, 24, 304]。しかし後には、直前の部分と対応させ、この部分には文字 t が彫り忘れられていると推測して、aṣ [t] g と翻字し、aṣ täg 「食料のように」と翻訳した。つまりテキン氏は、この一連の文章を yayımız tägrä oñq täg ärti biz aṣ [t]äg ärti と再建し、「我々の敵は (我々の) 周囲の暖炉の床のようであった。我々は (料理する鍋の中の) 食べ物のもようであった」という文脈で読み解こうとしたのである [Tekin 1994, pp. 4-5, 30-31; Tekin 1995, pp. 212-213]。

以上のように、先行研究では一文字目をどう翻字するかの段階から議論

となり、再建形に関しても決定案がないが、本稿はトムセン氏の見解を支持して一文字目を nt と読む。なぜならば、拓本を仔細に観察してみると、すでにオルクン氏が翻字で示しているように [Orkun 1936, p. 103]、一文字目は単に四角形が刻まれているだけでなく、その中心部分には文字の要素として確認できるくらいにはっきりと刻点を観察することができる。すなわち一文字目は  と刻まれているからである。トニユクク碑文では、中心にこのような刻点が残される文字として nt  がある¹¹⁾。実際に拓本を確認したところ、ほぼ全ての nt の中心に同じ痕跡の刻点が残されていた。そして nt の円弧はその刻点からほぼ等距離に描画されていた。つまり碑面に nt を刻む時には、まず文字の中心に一点を穿ち、その点を軸に外周の円弧を刻みつけたのであろう。本箇所の一文字目が他とは異なった文字形に刻まれた理由は、当初 nt を刻む予定で中心に一点を穿つ工程を経たが、次の工程では何らかの障害で外周を円ではなく、長方形に整形せざるを得なかったからではないだろうか。

このように碑面に刻まれている文字の状態から判断して、一文字目を nt とみなす。その場合、後掲するトニユクク碑文 29 行目【史料 B】にある同じ文字列び nt g を翻字することになり、äntäg と再建可能である。これは遠称の指示形容詞 ol に後置詞 tæg が附属した語形である [cf. Erdal 2004, p. 201]。以上のように考えれば、8 行目では先ず、狩猟生活を送っていた突厥側の状況が語られ、次に四囲を取り巻いていた敵方の様子が述べられた。その上で「我々は以上のものであった（かくのごとし）」と彼我の状況が総括された、と前後の文脈を整合させることができる。

2. トニユクク碑文 29 行目【第一碑文・北面 5 行目】

次の用例は、第二代默啜可汗の治世に行われた西突厥（^{オン=オク}十 箭／^{テュルギシュ}十姓）の後継政権である突騎施に対する遠征（710～711 年）直前の記述中に

ある。引用文の冒頭に記されたキルギズからの帰還は、突騎施遠征に先んじて行われた遠征からの凱旋である。これら二次の遠征の狭間に突騎施可汗のもとから到来した者がおり、その情報——突騎施に突厥襲撃の動向ありとの報せ——が、トニユクク率いる軍勢をアルタイ山脈方面に発動させる契機となった。

【史料B】 29～30行目〔第一碑文・北面5～6行目〕

(29) qırqızda : yantımız : türğış qayanta : körüg/küräg kälti : savı
 äntäg : öndün qayanyaru : sü yorilim temiş : yorımasar : bizni : qayanı
 alp ärmış : ayuaci : bilgä ärmış : qač nän ärsär

キルギズから我々は帰還した。突騎施可汗（のところ）から**斥候／逃亡者**がやって来た。その言葉は以下のものである。「『東へ（突厥の）可汗に向けて我らは進軍しよう！』と（突騎施可汗が）言ったそうだ。『もし行かなければ、我らを（彼らは殺すだろう）。その（突厥の）可汗は勇敢であり、彼の顧問は賢いという。どんなことがあろうとも

(30) bizni ölürtäci kök : temiş : türğış qayanı : taşıqmış tedi : on oq
 bodunı : qalısız taşıqmış : ter : tavyač süsi : bar ärmış : ol savıy : ešidip
 : qayanım : bän ävgärü : tüşäyin tedi

我らを彼らは必ずや殺すだろう』と（突騎施可汗が）言ったという。（そして）突騎施の可汗が出軍したという」と言った。「オン＝オクの民は残り無く（すっかり）出発したという」と（言った、）「唐の軍隊が（そこに）あったという」（と、言った）。その言葉を聞いて、我が可汗は「我は家に向けて撤退しよう！」と行った。

【語註】 1. 29, bizni 「我らを」：この人称代名詞（一人称複数の対格形）を受ける動詞部分は碑面に刻まれていない。しかし、文脈や次行冒頭（bizni ölürtäci）から判断して、この bizni の後に ölürtäci 「彼らは殺すだろう」

が記されるべきであったことは間違いない。

3. トニユクク碑文 33 行目 [第一碑文・北面 9 行目]

最後の用例は、【史料 B】に続く突騎施遠征についての記事中にある。まさに突騎施可汗の本営を襲撃する直前の様子が描写されており、アルタイ山脈で待機するトニユククのもとに三人の到来者があった。彼らが、すでに突騎施可汗も突厥襲撃に発動していると伝えたため、トニユククが默啜可汗の待機命令を振り切って出撃することになるのである。なお、この戦闘は突厥の勝利に終わったが、そのまま西方に戦線が拡大されたため、突厥のソグディアナ遠征（711～712 年頃）の前哨戦となった。

【史料 C】 32～33 行目 [第一碑文・北面 8～9 行目]

(32) bu süg elät : tedi : qīyīnīy : kōñūlūñā ay : bān saṇa nā ayayīn : tedi :
: kālir ārsār : körü kālūr : kālīmāz ārsār : tīlīy savīy : alī olur : tedi :
altun yīšda : olurtīmīz

「お前（トニユクク）はこの軍隊を連れて行け」と彼（默啜可汗）は言った。「罰をお前が思うように言い渡せ。我はお前に何か命令しようか？（いや、お前には何も指図しまい）」と彼は言った。「もし（敵が）やって来たら、（その様子を）見て来させよ。たとえ（敵が）来なくとも、（敵についての）情報を得ながら、（そこで）お前は待機せよ」と彼は言った。（そこで）我々はアルタイ山脈で（配置に）就いた。

(33) üc körüg/küräg evi evi kälti : savī : bir : qayanī sū tašīqdī : on oq
süsi : qalīsīz : tašīqdī : ter : yarīš yazīda : terilālīm temīš : ol savīy
ešīdip : qayanyaru : ol savīy ittīm 《後略》

三人の斥候／逃亡者が急ぎに急いでやって来た。彼らの言葉は同一であった。（すなわち）「その可汗は出軍した。オン＝オクの軍隊は残

りなく（すっかり）出発した」と。（そして）「（その可汗は）『ヤリシュ平原に我らは集合しよう！』と言ったという」。（彼らの）その言葉を聞いて、可汗に向けてその言葉を私は送った。《後略》

【語註】 1. 33, *evi evi* 「急ぎに急いで」：ラドロフ氏はこの箇所を *k i s i* と翻字して、*kiši* 「人間」と再建・翻訳した [Radloff 1899, pp. 16-17]。これは最近の研究でも踏襲されている [ex. Tekin 1994, pp. 14-15; Rybatzki 1997, pp. 36, 61; Berta 2004, p. 62]。この通説に対して、アールト氏が *y i y i* と翻字、*yiyi* 「次々に」と再建・試訳したことがあった [Aalto 1958, pp. 40-41]。しかし、この試みは顧みられることなく、ジェンギズ氏が諸トルコ語の用例 [cf. ED, p. 911a (*jiiyi*)] を挙げて彼の修正案を再検討しているだけである [Cengiz 2000, pp. 107-108]。実際に拓本や碑文を観察してみると、1文字目、3文字目の  はトニユクク碑文で刻されている前舌の *k* [] や *s* [] あるいは *y* [] と明らかに異なった字形である [cf. 森安・吉田 1998, p. 169]。これでは *kiši* とも *yiyi* とも読むことができない。そこで、代案として文字  はイェニセイ碑文で観察される前舌の *b* [cf. Васильев 1983, p. 7; Кормушин 1997, p. 18] であると提案したい。トニユクク碑文では文字表記上、同じ音を記すのに別字形を使うことが例外的に確認されている。例えば後舌の *T* について見れば、26行目[第一碑文・北面2行目]の *tuy* 「^{とく}蘚」の一文字目だけは  と刻まれているが、他は全て  が使われている [cf. Cengiz 2000, p. 107]。従って、ここに文字 *b* のヴァリエントを想定することも許容されよう。今、この部分の四文字を *b i b i* と翻字できれば、転写法則に従って *evi evi* と再建することができる。すなわち動詞 *ev-* 「急ぐ」[ED, p. 4b] の連用形 *evi* が連続していると考えれば、文献学的にも支障を来さず、文脈とも合致する。

第3節 語義の判定

前節で全ての在証例を見たように、問題の単語はいずれも突厥の軍事活動に先立って現れていた。ではトニユクク碑文における軍事活動とは、碑文全体の文脈上、どのようにとらえられるべきものなのだろうか。そこで以下にトニユクク碑文の全体構成を示す [cf. Clauson 1971]。

〔表〕 トニユクク碑文の内容構成

碑文通行数	碑文面 行数 ¹²⁾	テキストの内容
1 ～ 3	I.W.1 ～ I.W.3	唐朝による羈縻支配と突厥遺民の対唐叛乱
4 ～ 7	I.W.4 ～ I.W.7	クトゥルグとトニユククが率いた独立戦争
8 ～ 17	I.S.1 ～ I.S.10	トグズ = オグズ遠征 ⇒オテユケン山占拠
18 ～ 22	I.E.1 ～ I.E.5	漠南での戦闘⇒唐・キルギズ・突騎施三国同盟の報せ
23 ～ 28	I.E.6 ～ I.N.4	キルギズ遠征
29 ～ 43	I.N.5 ～ II.W.8	突騎施遠征
44 ～ 48	II.W.9 ～ II.S.4	⇒ソグディアナ遠征（※ここで年代順の記載が終了）
48 ～ 57	II.S.4 ～ II.E.7	トニユククの武勲の総括と彼への讃辞
58 ～ 62	II.E.8 ～ II.N.4	識語

先ず、碑面の大部分を使って彼の戦歴が年代順に記録されている。次に、碑文後半の十行余りを用いて彼の武勲が総括され、彼の活躍への讃辞が記されている。そして、最後の数行は、碑文の識語（奥付）とも言うべき箇所、骨咄禄の実子にして黙啜の甥、第三代^{ビルゲ}毗伽可汗の治世（716 ～ 734 年）に碑文を書かせたことが記載されている。注目すべきは彼の武勲が総括された部分である。そのなかで、トニユククは彼自身が領導してきた戦争について以下のような告白をしている。

〔史料D〕 52～54 行目〔第二碑文・東面 2～4 行目〕

(52) küntüz olurmatı : qızıl ük .¹³⁾ : qara tärım yügürü : işig küüg
: idi bertim ök : uzun yälmäg yämä ittim oq

昼、腰を落ち着かせずに、赤い 私の黒い汗がしたたりつつ（まで）、私は奉仕したのだった。長距離の偵察隊をも私は派遣したのだった。

(53) arquy qaruy : olurtım oq : yanıma : yaıy : kälürir ärtim :
qayanımın sülätımız : täñri yarlıqazu¹⁴⁾

アルクイ（？）監視塔を私は置いたのだった。（私たちを）脅かす敵を私は出て来させた。私の可汗を私たちは進軍させた。天神が仰せになったおかげで、

(54) bu türük bodun ara : yarıqlıy yaıy : yältürmädım : tögünlüg atıy :
yügürtmädım 《後略》

この突厥の民の間に、鎧を着けた敵を私は駆けさせなかったし、（敵の）焼き印を付けた馬を私は疾走させなかった。《後略》

彼は対外遠征で勝利するだけではなく、yälmä「偵察隊」の派遣や qaryu「監視塔」の設置といった防衛体制の確立も自身の功績であると考えていたようである。とすれば、トニユククが軍事活動の前に予め敵情視察のために「斥候、スパイ」を放っていたとしても不思議ではない。問題の一語は「斥候、スパイ」と訳出すべきではないだろうか。

そもそもハミルトン氏の指摘以来、多くの研究者が採用するようになった küräg「逃亡者、避難民」だが、そのウイグル文字での綴りはいずれも K W Y R ' K であり、それを再建する際の第二音節の母音は文字 ' アレフで規定されている。これでは当然 küräg と再建するしかなく、körüg と再建する余地はない。その観点からか、クローソン氏は、ウイグル文書中

の単語とトニユクク碑文中の懸案の単語とを截然と区別していたようである。氏が編纂した辞書 [ED, p. 741b] には *körüg* と *küräg* の二項目がたっているのに対して、かのウイグル文書 (MS SI 2 Kr 17) の分析では *küräg* 「逃亡者、避難民」の語が採用されているからである [Clauson 1973, pp. 216, 220]。

ところで、*küräg* 「逃亡者」に派生する動詞 *kürä-* 「逃げる」は、現存する突厥～ウイグル時代の碑文には在証例がなく [cf. ED, p. 737a]、突厥文字碑文で「逃げる」の意味を書き記す際には動詞 *tez-* が用いられている [cf. ED, p. 572a]。仮に「逃亡者、避難民」が突厥時代の碑文に現れるとすれば、*kürä-* の派生名詞が使用された可能性は低く、むしろこの *tez-* の派生名詞が用いられるのではないだろうか。すなわち名詞の派生元となる動詞レベルから判断するならば、*küräg* が突厥碑文に記載されていた可能性は低いのである。

一方、**第1節**で解説したように、問題の単語の綴りは *k ü r g, ü k ü r g* であった。第二音節の母音を規定する文字は刻されていない。これらは *körüg* とも *küräg* とも再建することができる。その上で「斥候、スパイ」と解釈するための眼目は、これを動詞 *kör-* 「見る」の派生名詞とすることであった。

では、動詞 *kör-* 「見る」について見てみよう。この動詞は突厥碑文でしばしば利用される一般的なものであるし [cf. ED, p. 736a; GOT, p. 352]、その派生名詞 *körgü* も同時代のキョル＝テギン、ビルゲ＝カガン両碑文で在証されている¹⁵⁾。そして、トニユクク碑文では次のような用例がある。

〔史料 E〕26 行目 [第一碑文・北面 2 行目]

(26) 《前略》 *yerc̣i : yeṛ yañiḷip : boyuzlanṭi : bunaḍip : qayan : yälü köṛ temiş*

《前略》 案内人が土地を（見）誤って、彼は喉頸を切られた。（道を間違えたのを）憂慮して、可汗は「お前は駆けて見よ」と言ったという。

キルギズ遠征中の記述であり、先程【史料D】で登場した名詞 yälmä「偵察隊」に派生する動詞 yäl-「（馬で）駆ける」とともに、動詞 kör-「見る」が利用されている。ここでは両動詞が組み合わされて、周囲の「様子を探って来ること」が含意されている。動詞 yäl- が名詞化した yälmä が「偵察隊」となるように、動詞 kör-「見る」の派生名詞である körüg が「ものを見るひと」を、ここでは敵情や道などを探る要員、つまり「斥候」を含意する潜在性は十分にある。

ところで、この派生名詞については、森安孝夫氏がウイグル語仏典 (Or. 8212/104) の識語に残された k ü r g という突厥文字の書き付けを史料の性格から判断して körüg と再建し、「校勘者、校正人」と解釈している〔森安 1985, pp. 30-31〕。確かにウイグル語仏典は突厥碑文より数百年下るものであるが、少なくとも古代トルコ語において動詞 kör-「見る」の派生名詞として körüg を指定することは文献学的に可能であると言えよう。今やトニユクク碑文上で k ü r g, ük ü r g を körüg と再建して「見る者」すなわち「斥候^{ものみ}」と翻訳する障害はないものと考えられる。

では、再度【史料C】に立ち返ってみたい。そこでは默啜可汗の命令が、「もし（敵が）やって来たら、（その様子を）見て来させよ（körü kälür）。たとえ（敵が）来なくとも、（敵についての）情報を得ながら、（そこで）お前は待機せよ」と発せられていた。とすれば、その直後、トニユククのもとに「急ぎに急いで」やって来た者とは、彼が「様子を見て来させ」た、あるいは「（敵についての）情報を得」させた者、まさに「斥候」であったと判定できる。ここで逆に「逃亡者、避難民」が現れたとすれば、文脈上いささか唐突な印象を受けるであろう。

というのも、前掲の【表】で確認できる通り、問題の単語が現れる三箇所はトニユククの功績を顕示することが期待される場面である。確かに、彼が敵対勢力から到来した逃亡者を捕らえてその軍機を得たのであれば、それは手柄として顕彰されもしよう。しかし逃亡者は偶然に到来するものである。偶然を、しかも三度も手柄の契機とするのは、彼の武勲の価値を下げてしまわないだろうか。それに対して、碑文全体の流れを汲むのであれば、すなわち彼が自己の手柄を誇る文脈を終始一貫させようとするのであれば、三つの場面には彼が戦略的に放っておいた斥候が登場するに相応しい。斥候が物語に登場する前提として「参謀／軍事司令官」として突厥可汗を補佐するトニユククの手腕が示唆されているのであり、そうであればこそ彼の軍功を顕彰するという碑文の目的が貫徹されるからである。

「斥候」の語は、突厥の軍事行動を前提にしている【史料A～C】のいずれにおいても文意・文脈を損なうことがない。それ故、これまで考察してきた突厥文字の再建法やこの名詞に派生する動詞の用例、トニユクク碑文の撰文目的といった観点から、問題の文字列 k ü r g, ü k ü r g は、körüg と再建され「斥候」と解釈されるべきものと結論する。

おわりに

本稿の考察結果は、トニユクク碑文のテキスト中に körüg「斥候」の一語を確定したことである。改めてこの「斥候」がテキストに出現する場面を整理すれば次のようになる。

- ①突厥遺民が唐朝の羈縻支配から独立して陰山山脈の北麓に安住 ⇨

トクズ=オグズ タブガチ キタイ
【史料A】斥候の到来：九姓鉄勒・唐・契丹に突厥包囲網の動

きありとの報せ ⇨突厥軍がトクズ＝オグズ遠征のためモンゴル高原に出撃

- ②キルギズ遠征から突厥軍が凱旋 ⇨【史料B】斥候の到来：突騎施
可汗が突厥攻撃を準備中との報せ ⇨トニユクク率いる突厥軍がアルタイ山脈方面に出発
- ③突厥軍がアルタイ山脈で待機 ⇨【史料C】三人の斥候の到来：突オン=オク騎施可汗麾下に十姓軍が集結中との報せ ⇨トニユククの軍勢が奇襲に出撃

このように斥候が現れる時機を見てみると、いずれも突厥が軍隊を発動する直前であったことがわかる。斥候はいずれも枢要な情報をもたらし、突厥可汗国の行動方針をトニユククそのひとに決定させていた。斥候は場面場面に危機の知らせをもたらすことで脅威への対応を迫っており、物語に緊張感を刻印している。とりわけ①・②の前後では、平和な状態から戦争状態へと場面転換がなされていたのであり、物語の流れを転換する役割を果たしている。斥候はテキストを読む者の注意を喚起する演出装置であったと言えるのではないか。

振り返ってみれば、上に示した二次の遠征は突厥史において特に意味のある事件であった。①のトクズ＝オグズ遠征は突厥のモンゴル高原の奪還に結実し、680年代、復興後間もない第二可汗国がトクズ＝オグズを斥けて草原遊牧世界の中心地を領有する発端となった。②・③の突騎施遠征は突厥の十姓（西突厥）併合に帰結し、第二可汗国が「三十姓突厥」を自称する前提となる部族支配を完成させる契機となった〔鈴木 2006, pp. 16, 19〕。いずれも第二可汗国が中央ユーラシアの草原世界で新たに支配部族や領域を拡大するターニングポイントである。その意味で、二次の遠征がトニユクク碑文の強調点であったことは推測に難くない。対外遠征を勝利に導いたトニユククの武勲は斥候という演出装置によってテキスト上、明確に強調されていたのである。

本稿が扱ったトニユクク碑文のほかにも、突厥・ウイグル可汗国時代に成立した突厥文字碑文には、軍事活動や対外遠征について多くが記録されており、それらが古代トルコ系遊牧民によっていかに重視されていたかをうかがうことができる。彼らが語り残した記録は、当時の遊牧民がいかなる意識のもとで、どのような目的をもって碑文を作成したのかを考察するための手がかりとなるばかりでなく、中央ユーラシア東部地域を席卷した彼らの圧倒的な軍勢力がいかに行使されていたかを探求するための史料にもなる。その観点からも碑文に残された記事を総体として把握し、更なる分析を加えることを今後の課題としたい。

註

- 1) トニユクク碑文の主人公について、漢籍に登場する阿史徳元珍との別人説もあるが、本稿は〔護 1972〕の考察に従い、トニユクク・阿史徳元珍同一人物説の立場をとる。なお、トニユクク碑文ならびにその研究史については拙稿〔鈴木 2003〕を参照。
- 2) 突厥文字（ルーン文字）の翻字・再建は〔森安・オチル 1999, p. 119〕の対照表に準拠する。
- 3) Thomsen 1924, pp. 163, 166-167; 小野川 1943, pp. 318, 322-323; Малов 1951, pp. 61, 63, 65, 67-68; 岑 1958, pp. 858, 860-861; Aalto 1958, pp. 32-33, 40-41; Giraud 1961, pp. 54-56, 145; GOT, p. 352; ДТС, p. 318.
- 4) Erdal 1991, pp. 196, 422; Tekin 1994, pp. 5, 32; Tekin 1995, p. 213; Berta 1994, p. 51; Berta 1995, pp. 313-315; Rybatzki 1997, p. 90; Berta 2004, p. 49.
- 5) 芮 1998, pp. 278, 281-282; 耿 2005, pp. 96, 101-102; 蔡 2001, p. 122。なお、本文であげた斥候、逃亡者の二説とは別に、オルクン氏は *körüg* と再建して「使者、密使」と翻訳し〔Orkun 1936, pp. 102, 110, 112〕、タウベ氏は *küräg* と再建して「反逆者」としているが〔Taube 2002, p. 337〕、いずれも文献学的な根拠を示さぬ意識にすぎず、採用することはできない。
- 6) ラドロフ拓本については、Atlas 1899, Taf. CIX-CXVI; *Orkhon*, pp. 47-56 を参照。
- 7) 直前の6行目行末には *bilgä toñuquq boyla baya tarqan* と書かれているので、文意を明らかにするため補足した。

- 8) ジロー氏は本箇所を bolayin と再建し、指示代名詞である bu に分詞 -layin が付いた語形と見て「そのように、その方法で」と翻訳するが、文法的に無理がある。
- 9) 『通典』卷一九八・边防一四・突厥中・永淳二年〔中華書局標点本、p. 5343〕。この記事は『旧唐書』卷五・高宗本紀・永淳元年の条と同内容であることから、引用記事を永淳元年に繫年した。ところで漢籍に記載された「總材」をチョガイ（チュガイ）の音訳とする研究 [ex. 岑 1958, pp. 858, 878; 芮 1998, pp. 16-20] があるが、「總」、「材」の中古音 *tsung, *dz'ɿi をもって直ちに ɕoyay の音写形であるとは考え難い [cf. GSR, 1198i, 943g]。また、テズジャン氏は ɕuyay を漢語の「石灰」の音写語と考えているが [Tezcan 1995, pp. 230-231]、「石」の中古音は *ʒiäk, 「灰」は *xuɿi であり [cf. GSR, 795a, 950a]、やはり無理がある。
- 10) ラドロフ氏はチョガイ（チュガイ）をモンゴル高原のハンガイ山脈に求めた [Radloff 1899, p. 36]。一方、トムセン氏は ɕoyay がチャガタイ語の ɕoya「影」の派生語である可能性を示唆してはいたが、チョガイ山を「暗い山林」と訳出したにとどまった [Thomsen 1896, pp. 117, 169 (n. 73)]。実際にチョガイ山を現在の内蒙古自治区の陰山山脈に比定したのは、岩佐氏であり、海外ではツェグレーディ氏が初めてであった [Czeglédy, 1962, pp. 57-59]。その後、劉茂才氏による漢籍のドイツ語訳 [Liu 1958, pp. 217-218, 253-234] を利用したクリヤシュトルヌイ氏もチョガイ（チュガイ）の位置を陰山方面としている [Кляшторный 1964, p. 26]。しかし、ガバイン氏がハンガイ説を採ったため [Gabain 1949, pp. 33-34]、現在に至るまで第二可汗国が復興した舞台である「チョガイ（チュガイ）山脈」をハンガイ山脈とみなす誤解が継承されている点 [ex. Giraud 1960, pp. 169-171, Carte 1; Tezcan 1995, p. 231] には警鐘を促しておく。
- 11) トニユクク碑文では文字 b, y, T における円弧部分の中心にも同じように刻点が観察できる。ただし、これらは文字の中心線から上下に僅かにずれているので、nt とは明確に判別できる。
- 12) I. は第一碑文（全 35 行）を、II. は第二碑文（全 27 行）を示している。W, S, E, N はそれぞれ、西、南、東、北面を示し、その後の数字は各面内の行数を示す。
- 13) ラドロフ氏は qizil「赤い」の後に altun tökti と読んでいたが [Radloff 1899, pp. 22-23]、トムセン氏が qanīm tükäti と修正した [Thomsen 1916, p. 68 (n. 1)]。つまり、直後に続く「黒い汗」と対応させるため、本箇所に「私の血を尽くしつ」と補ったのである。その後、アールト氏はトムセン氏が

補足したように、前後する部分を *iQ i z l Q N m : t ü k t i : Q R a t r m y ü g r ü* と翻字した [Aalto 1958, pp. 46-47]。しかし、本稿が底本とした大阪大学所蔵拓本ではその一部しか確認できなかったため、拓本通りの再建にとどめた。

- 14) ラドロフ氏は語尾 *-zu* を三人称命令形とみなして、*täpri yarlıqazu* を「天神よ恵みあれ!」と訳出し [Radloff 1899, pp. 22-23]、諸研究が継承している [ex. Orkun 1936, p. 118; 小野川 1943, p. 326; Малов 1951, p. 69]。特にテキン氏は *-zu* を三人称命令形の語尾 *-zün/-zun* のヴァリエントと見なしているようだが [GOT, p. 187; Tekin 1994, p. 21; Tekin 2000, p. 181]、エルダル氏はこれを三人称命令形語尾の範疇に入れられるかどうか明確な判断は下せないという [Erdal 2004, pp. 235-236]。一方、トムセン氏は *täpri yarlıqazu* を「天神の恵みのために」と訳出したが [Thomsen 1924, p. 170]、後にジロー氏が明記しているように [Giraud 1961, p. 117]、これは、キョル = テギン碑文・東面 29 行目では *täpri yarlıqazu* と書かれていた箇所が、並行するビルゲ = カガン碑文・東面 26 行目では *täpri yarlıqaduq ücün* 「天神が仰せになったおかげで」と修正されていた事実を踏まえているからと推測される。なるほど、後者の解釈の方が、より自然に文意を通じさせることができる。従って、本稿はトムセン、ジロー氏の見解に従った [cf. Aalto 1958, pp. 46-47; Rybatzki 1997, p. 122]。
- 15) キョル = テギン碑文・東面 23 行目 [ビルゲ = カガン碑文・東面 19 行目] に一例がある。なお、テキン氏はこれを *kürägü* と再建し「従順ではないこと、言うことを聞かぬこと」と解釈している [cf. GOT, p. 355]。しかし、前後の文脈を考慮するならば、クローソン氏の見解である *kör-*「見る、従う」の派生名詞 *körgü*「見ること、服従」が相応しいと考えられる [ED, p. 742a]。

略号・文献目録 (ABC 順)

- Aalto, P. 1958: "Materialien zu den alttürkischen Inschriften der Mongolei. Gesammelt von G. J. Ramstedt, J. G. Granö und Pentti Aalto," *Journal de la Société Finno-Ougrienne* 60-7, pp. 1-91.
- AOH: *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*.
- ATIM: W. Radloff, *Die alttürkischen Inschriften der Mongolei*. 1. Lieferung 1894; 2. Lieferung 1894; 3. Lieferung 1895; Neue Folge 1897; Zweite Folge 1899, St. Petersburg.
- Atlas: W. Radloff, *Atlas der Alterthümer der Mongolei. Arbeiten der Orchon-Expedition. (Атласъ древностей Монголіи. Труды Орхонской Экспедиции.)*, 1. Lieferung 1892; 2. Lieferung 1893; 3. Lieferung 1896; 4. Lieferung 1899, Санктпетербургъ.

- Berta, Á. 1994: "Die Verteilung der militärischen Termini in den Runeninschriften," AOH 47-1/2, pp. 49-56.
- 1995: "Neue Lesungs- und Deutungsvorschläge für die Inschrift Toñuquq," AOH 48-3, pp. 313-320.
- 2004: *Szavaimat jól halljátok... A türk és ujjur rovásírásos emlékek kritikai kiadása*. Szeged.
- 蔡 鴻生 2001: 『唐代九姓胡与突厥文化』中華書局.
- 岑 仲勉 1958: 『突厥集史』上・下, 中華書局.
- Cengiz, A. 2000: "Bilge Tonyukuk Yazıtları Üzerine Birkaç Düzeltme," *Türk Dilleri Araştırmaları* 10, pp. 103-112.
- Czeglédy, K. 1962: "Çoray-quzı, Qara-qum, Kök-öng," AOH 15-1/3, pp. 55-69.
- Clauson, G. 1971: "Some Notes on the Inscription of Toñuquq," L. Ligeti (ed.), *Studia Turcica*. (Bibliotheca Orientalis Hungarica 17), Budapest, pp. 125-132.
- 1973: "Two Uygur Administrative Orders," *Ural-Altaische Jahrbücher* 45, pp. 213-222.
- ДТС: В. М. Наделяев *et al.* (eds.), *Древнетюркский словарь*. Ленинград, 1969.
- ED: G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford, 1972.
- Erdal, M. 1991: *Old Turkic Word Formation*, 2 vols, Wiesbaden.
- 2004: *A Grammar of Old Turkic*. Leiden/Boston.
- Gabain, A. von 1949: "Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken," *Der Islam* 29-1, pp. 30-62.
- 耿 世民 2005: 『古代突厥文碑銘研究』中央民族大学出版社.
- Giraud, R. 1960: *L'Empire des Turcs Célestes. Les règnes d'Elterich, Qağghan et Bilgä (680-734)*. Paris.
- 1961: *L'Inscription de Baïn Tsokto*. Paris.
- GOT: T. Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*. Bloomington/The Hague.
- GSR: B. Karlgren, *Grammata Serica Recensa*. Stockholm, 1957.
- Hamilton, J. 1986: *Manuscrits ouïgours du IX^e-X^e siècle de Touen-houang*. 2 vols, Paris.
- 岩佐精一郎 1936: 「突厥の復興に就いて」『岩佐精一郎遺稿』岩佐傳一（発行）, pp. 77-167.
- Кляшторный, С. Г. 1964: *Древнетюркские рунические памятники как*

- источник по истории Средней Азии. Москва.
- Кормушин, И. В. 1997: *Тюркские енисейские эпитафии. Тексты и исследования*. Москва.
- Liu Mau-tsai 1958: *Die chinesischen Nachrichten zur Geschichte der Ost-Türken (T'u-Küe)*. 2 Bde., Wiesbaden.
- Малов, С. Е. 1951: *Памятники древнетюркской письменности. Тексты и исследования*. Москва/Ленинград.
- 護 雅夫 1972: 「阿史德元珍と Tonyuquq」『山本博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社〔再録:『古代トルコ民族史研究Ⅱ』山川出版社、1992, pp. 86-97〕.
- 森安孝夫 1985: 「ウイグル語文献」『講座敦煌 六 敦煌胡語文献』大東出版社, pp. 1-98.
- 森安孝夫・オチル (А. Очир) 1999: (責任編集)『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会。
- 森安孝夫・吉田 豊 1998: 「モンゴル国内突厥ウイグル時代遺蹟・碑文調査簡報」『内陸アジア言語の研究』13, pp. 129-170.
- 小野川秀美 1943: 「突厥碑文譯註」『滿蒙史論叢』4, pp. 249-425.
- Orkhon: D. Vasiliyev et al. (eds.), *Orkhon. The Atlas of Historical Works in Mongolia. (Orhun. Moğolistan Tarihi Eserleri Atlası)*, Ankara, 1995.
- Orkun, H. N. 1936: *Eski Türk Yazıtları*. I. İstanbul.
- Radloff, W. 1899: "Die Inschrift des Tonyukuk." = ATIM, Zweite Folge 1899
- 芮 伝明 1998: 『古突厥碑銘研究』上海古籍出版社。
- Rybatzki, V. 1997 *Die Toñuquq-Inschrift*. (Studia uralo-altaica 40), Szeged.
- 鈴木宏節 2003: 「トニユクク碑文研究史概論」『シルクロードと世界史』(大阪大学 21 世紀 COE プログラム 2002・2003 年度報告書), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 113-130 [中国語訳: 羅新 (訳)「墩欲谷碑文研究史概論」『中国史研究動態』2006-1, 2006, pp. 20-27].
- 2006: 「三十姓突厥の出現 — 突厥第二可汗国をめぐる北アジア情勢 —」『史学雑誌』115-10, pp. 1-36.
- Taube, J. 2002: "Eine runentürkische Inschrift (Tonyukuk, 01-16) im Lichte von Jean Gebsters Geschichte der Bewußtwerdung (Mit einem Nachtrag zu Tonyukuk 17-32)," M. Ölmez & S.-C. Raschman (eds.), *Splitter aus Gegend von Turfan. Festschrift für Peter Zieme anlässlich seines 60. Geburtstags*. (Türk Dilleri Araştırmaları Dizisi 35), İstanbul/Berlin, pp. 333-365.
- Tekin, T. 1994: *Tunyukuk Yazıtı*. (Türk Dilleri Araştırmaları Dizisi 5), Ankara.

- 1995: “Some remarks on the Tunyukuk Inscription,” M. Erdal & S. Tezcan (eds.), *Beläk Bitig. Sprachstudien für Gerhard Doerfer zum 75. Geburtstag*. (Turcologica 23), Wiesbaden, pp. 209-222.
- 2000: *Orhon Türkçesi Grameri*. (Türk Dilleri Araştırmaları Dizisi 9), Ankara.
- Tezcan, S. 1995: “Über Orkhon-türkisch *çuyay*,” M. Erdal & S. Tezcan (eds.), *Beläk Bitig. Sprachstudien für Gerhard Doerfer zum 75. Geburtstag*. (Turcologica 23), Wiesbaden, pp. 223-231.
- Thomsen, V. 1896: *Inscriptions de l'Orkhon déchiffrées*. (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne 5), Helsingfors.
- 1916: *Turcica. Études concernant l'interprétation des inscriptions turques de la Mongolie et de la Sibérie*. (Mémoires de la Société Finno-Ougrienne 37), Helsingfors.
- 1924: (Trns. by H. H. Schaeder), “Alttürkische Inschriften aus der Mongolei,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 78 (Neue Folge 3-2), pp. 121-175.
- Tuguševa, L. Ju. 1971: “Three Letters of Uighur Princes from the MS Collection of the Leningrad Section of the Institute of Oriental Studies,” АОН 24-2, pp. 173-187.
- Васильев, Д. Д. 1983: *Корпус тюркских рунических памятников бассейна Енисея*. Ленинград.

付記 本稿は平成二十年度文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。

（大学院博士後期課程修了）

（日本学術振興会特別研究員 早稲田大学教育・総合科学学術院）

SUMMARY

Notes on the Turkic Inscription of Toñuquq: Does an Unsolved Word Mean ‘Scout’ or ‘Fugitive’ ?

Kōsetsu SUZUKI

The Inscription of Toñuquq, one of the Turkic Inscriptions made under the Second Türk Qayanate (682-744), has an unsolved word spelled like k-ü-r-g or ük-ü-r-g in Runic which we can not attest in the other inscriptions. Some researchers transliterated the word as *körüg* stemmed from *kör-* ‘to see’ and translated it into ‘scout, spy’, the others transliterated the word as *küräg* stemmed from *kürä-* ‘to run away’ and translated into ‘fugitive, runaway’. This article deals with the unsolved word and its aim is to decide whether it is *körüg* or *küräg*.

Firstly, the author makes a new text of the Inscription of Toñuquq by revising the paper rubbings kept in the Osaka University and shows the three examples in which the unsolved word written on the text.

Secondly, through analyzing the context of the inscription which aims to recognize himself and his military achievements of Toñuquq, the author proposes that in several scenes where the unsolved word mentioned ‘scout’ should be involved. Based upon this assumption, the author proves that *körüg* must have been inscribed on this text from philological points of view.

The author concludes that the unsolved word must have been transliterated as *körüg* and translated into ‘scout’. This word was used in this inscription in order to celebrate his military achievements of Toñuquq who lead several campaigns of the Second Türk Qayanate against outside enemies to victory and expanded their territory on the eastern part of the Central Eurasia.

キーワード：古代トルコ民族，遊牧民，突厥，突厥碑文，トニユクク